



TITLE:

價格に於ける歴史的傳統性 - 分配
關係に於ける日本的性格に觸れつ
ゝ -

AUTHOR(S):

桑原, 晉

CITATION:

桑原, 晉. 價格に於ける歴史的傳統性 - 分配關係に於ける日本的性格に
觸れつゝ -. 經濟論叢 1940, 50(6): 771-780

ISSUE DATE:

1940-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/131391>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

第五卷第十六號

昭和十五年六月

論叢

支那に於ける農地の典に就いて……………經濟學博士 八木芳之助
統制經濟下に於ける統計と經理……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

利潤統制の革新的意義……………經濟學博士 谷口吉彥

研究

清末紙幣考……………經濟學士 德永清行

『道德情操論』の研究……………經濟學士 白杉庄一郎

德川時代に於ける丹後縮緬機業の發展過程……………經濟學士 堀江英一

說苑

價格に於ける歴史的傳統性……………經濟學士 桑原晉

北陸の漆器工業……………經濟學士 田杉競

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十卷總目錄

説苑

價格に於ける歴史的傳統性

— 分配關係に於ける —

日本的性格に觸れつゝ —

桑原 晉

一

一切が値段段附けせらるゝ現代人の生活は價格生活である。貨幣が經濟的評價の一般規準をなす相を吾々は貨幣經濟と呼ぶ。生産が主として資本の運用による相を資本的生産と呼び、財貨が凡て貨幣を取得するために生産される姿を資本的商品生産組織と呼ぶ。資本制的商品生産の目的は、原則として利潤の追求にある。利潤は結局商品賣買によつて實現し、賣買は價值をめぐりて行はる。交換交通の中心點に立つものは價格である。ここでは、商品生産者と消費者とは、原則とし

價格に於ける歴史的傳統性

て分離する。分離しつつも、社會自然的に相即することとを特色とする。生産は常に消費者需要を搜し求める。價格決定根據を經濟的に限定するならば、需要と供給とが相互依存の關係に立ちつゝ均衡するところ價格は決定する。

茲に於て注意しなければならないことは、商品の歴史的傳統價格である。即ち、上來の説明は、現在に於ける商品價格が需要供給關係によつて定まると云ふことの一瞥であつたが、需要供給關係の基礎に或は夫と平行して、商品が歴史的に獲得し來れる價格をも考慮しなければならぬ。もしさうだとすれば、價格は歴史的に受取れる繼承的價格をめぐりて、需要供給の關係によつて決定すると云ふべきである。それと共に、未來への豫測をも内容とする。

云はゞ、價格は、純經濟理論的には、過去より受取れる價格に準據し、時の生産費を中心として、未來への豫想を孕みつつ、現在の需要供給の關係によつて定まる。具體的には、此の外に、尙諸々の社會的法制的

1) 詳しくは拙著「經濟原論教材」第三篇第三章參照。

自然的事情が立働らくだらうことは言ふまでもない。
以下、實例を以て、這間の事情と理由とを明かにしたいと思ふ。

二

前述の如く、凡て商品の價格は、歴史的傳統價格を繼承し、現實の生産費を中心として需要供給の關係によつて定まる。其の場合、需要者並に供給者の社會的勢力が作用することは勿論である。此の理法はそのまゝ小作料についても當てはまると思ふ。

日本の小作料は、明治のはじめ、徳川封建時代の小作料をそのまゝ繼承したものであることは事實の示すところである。²⁾「爾來、土地の肥瘠、技術的進歩に依る收穫の増加、交通の便否、水利の便否、隣地小作料との比較、土地賣買價格、地租其他の諸掛等を斟酌して、漸次部分的に小作料額に變化を來し、或は小作人相互の競争に依り、その騰貴を促し、又耕地整理の施行に伴ひ、小作料の改定をなしたる所もありて、殆んど舊態を失ふ地方を見るに至れり」³⁾。

本邦小作料は、しからば、高いか低いかの問題である。一言にして言へば、極めて高率にあることを注意せねばならぬ。物納であることと共に、歐米に其の類を見ないところの日本の特徴がある。高い所以を私はかう考へて來てゐる。⁴⁾

まづ歴史的沿革を尋ねれば、徳川封建時代よりそのまゝ繼承しゐるために、本來高率に在つたことが其の一。即ち五貢五民の租税思想が地代にも支配し、收穫高の約五割見當である。之を諸外國の金納小作料を收穫高に換算すれば約二三割とならうか。

その二は、日本が農業國であり、殊に小作農國であることのゆゑに、小作地の拂底を來したことが、需要供給の大原則に従つて、小作料を高めしこと。

その三は、益々増加しゆく過剩人口のうめきが、彌が上にも小作地に對する競争意識を募らせ、従つて小作料を驕り上げしこと。

その四は、地主對小作人の社會的勢力關係をあげやうと思ふ。

2) 拙著「日本國民經濟學」三三一頁。
3) 農林省農務局「本邦小作慣行」大正十五年所收「大正十年小作慣行調査」六一頁。
4) 拙著「日本國民經濟學」三三二頁。

更に一つ見落すことの出来ない理由がある。それは日本に於ける資本主義が移植されたものであり、日本に於ける農業に半封建的生産關係が支配して來てゐるために生じた事柄である。即ち日本の資本主義が上からの指導によつて可能ならしめられた資本主義であるために、「十分なる素地をもたない、政治的指導にもとづく資本主義化は、當然多くの點に資本主義化せられざるものを残したのであるが、しかしとくに農村に對しては、産業革命の必要の犠牲となること、したがつて資本主義の犠牲になることが要求せられたのである。即ち當時の爲政者は、官營學校、模範工場制度などをつくることによつて、機械制工場生産の移植に懸命な努力を試みたのであつたが、このことを遂行するための経費は、いふまでもなく、いまだ資本主義的産業の起らない當時の状態にあつては、農村經濟の負擔にするより他はなかつた。當時の財政經常收入の大部分は、維新までのわが國經濟が農業經濟の段階にあつたことからしても明かであるやうに地租からなつてゐた

價格に於ける歴史的傳統性

のであつて、國家はこの地租の納入を確保するために、地主を擁護しなければならなかつた。その結果また土地を實際に耕作してゐる多くの小作人の對地主關係は封建的な關係をそのまゝに放置せられたわけである。農業に於ける雇傭關係と、極めて高い小作料とが、この事實を十分に證明してゐる」(圈點筆者)

前述の如く、日本に於ける小作料は傳統的に極めて高率に在つて、諸列強に其の比を見ない。その理由も大體のべたが、國民經濟の機構から言へば、日本が本來農本國であり、今日とても重要な役割を有つところに歸着するが、單に土地所得としての小作料だけではないに、利子・利潤・配當等凡て有つ者の側における所得が諸列強に比して高位に在ることと並べて、其反面有たざる者の所得としての勞賃が諸列強に比して低位に在るのと思合するとき、日本國民所得形成過程に對する日本的自己反省なかるべからざるの思ひ切々。

三

利子も亦、他の所得と同じく、價格即ち資本利用に

對する價格であるから、價格決定の一般理法に従ひ、需要供給の關係によつて決定される。即ち特定社會に於ける資本の總需要と總供給との平衡するところの利子歩合は決定される。

従つて日本の金利が高いといふところには、資本の供給の不足がかくれてゐると見るべきである。金利が一般に高率なることが、日本金融市場に於ける顯著なる特色であるが、其の特色を特色づけるものゝ一つは、前述の如く幕末からの遺産であるところの傳統的繼承價格に求め、その二を此の資本缺乏に求めやうと思ふ。

しからば、明治初年に於ける金利は如何なる高さに在つたかと云へば、「略ぼ幕末の舊格を逐ふて定まり、一割三四分(年利)より二割の間を往來したものゝ如くであつた⁶⁾。此のことは、小作料が徳川時代の高さを繼承せると符合して興味多し。茲にも亦、私の價格決定理法の一特色たる傳統的繼承價格(利子も金利も共に價格である。前者は資本利用の價格であり、後者は資金又は通貨利

用に對する價格である)を證明する事實の一つを見ることが出来て、益々意を強うせざるを得ない。

兎に角維新早々高率なりし所以は、畢竟、幕末高利率なりしに因ると見るべきである。爾來金利は概して低下の傾向を辿つて來たが、未だに此の傳統から抜け切れずに尙高率にある。日本金利の高率なる理由の一つを私は此處に求めやうと思ふ。

昭和五年來朝したモールトン博士も「金利が一般に高位に在ることとは何等日本現下の根本的經濟事情に起因するものではないやうで、寧ろ近代期の初期に於て貸付資金の供給が十分でなかつた頃からの情勢(圖點筆者)に因るものと觀るべきである。之に關聯して想起されることは、明治の初期に於て日本には未だ金融市場なるものなく、政府の發行に係る最初の外債は九分利付であつたことである。又明治の初期二三十年間を通じて資本の供給は非常に少く、従て公私企業の借入金利率は勢ひ高からざるを得なかつた。貸付の利率が非常に高かつたのであるから、貯蓄預金に對する利率も

6) 東洋經濟新報社、金融六十年史「五八八頁。

亦高位に定められたのは異とするに足らない。而して貸付及預金とも一旦高金利が習慣となつて了つた後では、全體の金利を變革することは中々困難である。」

しからば、何故に資本は缺乏し不足を告ぐるか。之は二つの方面から考へうと思ふ。一は對内的原因であり、他は對外的原因である。

即ち對内的には、日本資本主義はその生産力が低率に在るにもかゝはらず、その割合に消費多く、従つて擴張再生産に振向けらるべき資本部分が少いからである。「この關係は外國貿易の上にも明瞭に現れてゐる。

すなはち、我國には再生産に役立たない消費財の輸入が非常に多いのに對し、これを償却すべき貿易外の受取勘定が少ない。この結果、僅に過去に蓄積した資金を切崩すか、または外債を起して一時を彌縫することになり、國民全體が資本を食ひ、ボロ會社の蝸配當に類するやうなことをやつてゐるのである。」

しかるに、他方、對外的に外債を起して外資を輸入することが、どれだけ日本の資本供給に役立つたかと

價格に於ける歴史的傳統性

云ふに、なかなか思ふ通りに外資は這入つて來ない。

何故かと云ふに、結局は信用の問題である。日本の財政經濟に對する一般的不信認と、特に產業界の投機性に對する不安があるからである。茲に金利高の一原因を拾ひ上げれば、信用の缺乏と云ふことにならうか。即ち之がその三。その四は金融機構の不完全をあげやうと思ふ。詳言すれば、銀行その他の信用機關がうまく行かず、都鄙資金融通も圓滑を缺くために、資本の融通が鈍く且つ少い。

かうした幾つかの事情によつて、日本の金利は法外に高く、殊に英米諸國の倍位に在ることが多かつた。此のことは言ふまでもなく、放資資本家にとつて好都合である。さらぬだに退隱的な日本人をして利子依食的有閑階級人たらしめる。

四

勞銀についても同様のことが云へると思ふ。勞銀決定の理は、一般商品價格決定と同様に、單一なる原因を以て之に答へんとすることは不可能であり、不完全

7) モールトン著 洪譯 日本財政經濟論 一三三頁。
8) 岡實著 經濟學概論 二七九頁。
9) 拙著 日本國民經濟學 一三四頁。

である。結局諸種の原因の共働と見るべきである。勞銀決定の理に關する諸種の學説は何れも不完全であるが、何れも一面の眞理をもつと見たい。多數の學説が岐るゝは、結局原因がそれだけ多様であることの證據ではあるまいか。敢て言ふべくんば、一般の商品と異り、勞働は特殊の商品である以上、自ら異れる原因あるべきは一應察知しうる。何ぞや。人を離れては勞働存在せざることである。云はゞ、人間の意志を常に反映することが異なる。詳言すれば、勞働者個人の我の自覺、社會的勢力の自覺、從つて來る勞働者階級の團體的行動は、普通の商品に見るべからざるものであると云ふことである。それを特殊の原因とし乍ら、生産費を基準としつゝ、需要供給の法則によつて決定される。しかるに、勞銀は一般商品價格よりも固¹⁰⁾定性を有つ。從つて、殊に勞働の中心市場より遠ければ遠いだけ、勞銀は慣習によつて決まるそれがある。歴史的には傳統性の問題が茲に潜んでゐるわけである。

因みに各國勞働者の勞銀を比較すれば一與なしとせ

ぬ。勞銀を考ふる場合には一般に、貨幣勞銀の比較だけが先づ取上げられるが、インフレーション・デフレーション・スタビリゼーション等典型的通貨政策によつて貨幣價值の變動大なる場合には、貨幣價值の變動即ち物價の變動との關係に於て、云はゞ實質勞銀を比較することが重要な問題となつて來る。例へば、特に濠洲に於ては貨幣資金も高く實質資金も斷然高位に在るが、その理由として考へらるべきことは、米國に於けると同様主として勞働者一人當りの生産力の増加に依るものらしい。又人口密度小なるために人間の價值が大なる點も一考すべきことである。又熟練勞働者と不熟練勞働者との賃銀の差も問題となるが、之は或程度まで程度の差であり、主として其の國の生産組織によつて決せらるべき事柄である。云はゞ生産組織が熟練不熟練の何れを需要するかによつて定まることである。例へば、日本の從來の如く、纖維工業又は輕工業中心の生産組織に在つては、大した熟練工を必要とせざるにつき、熟練勞働者と不熟練勞働者との賃銀上の

10) 拙著「經濟原論教材」二二二頁。

差大ならず。賃銀の開きは寧ろ封建的な殘滓として、云はゞギルド的な身分上の開きから来る賃銀上の差異に歸せしむべきでないかと思ふ。しかしながら、教育と技術の修練とが普及するにつれて、兩者の能率上の差異が益々少くなりつゝあることは世界的な傾向である。又、男子及女子の賃銀差であるが、世界的傾向として、男子勞働者に對して女子勞働者が其の賃銀に於て益々接近しつゝある。

之に關連して一言したきは、日本に於ける工場勞働者の産業別賃銀總平均は、昭和十一年支那事變前の統計によると、一圓三十錢の低位に在るが、これは一般に本邦賃銀の低廉なることから來ること勿論であるが、低廉なる女子の賃銀と平均されてゐるからであり、而も最も低廉なる纖維業従業員女子勞働者が女子勞働者中の過半数を占めてゐるからである。しかるに、本邦勞働賃銀が世界各國に比して夫れ自體低位に在ることは事實である。

しからば、何故に低廉であるかと云へば、一般にあ

價格に於ける歴史的傳統性

げらるゝ理由は、日本人の生活標準が低いといふことである。勿論、之は一つの大きな理由であらうが、生産力が小であることも忘れてはなるまい。それと共に、所謂産業豫備軍に相當する者が非常に多きを常とすること、特に勞働供給源として農村が餘裕を有つてゐるからであるために、一途に勞銀率の引上げをなさしめえざるブレキの役目を果してゐることも注意すべきことと思ふ。更には家族制度日本を理由とし、勞働者の勞働意思殊に女子勞働者の勞働希望が家族生活維持の補助といふ點から來ること大なるために、低賃銀に甘んずるからであらう。又勞働組合其他の勢力團體の政治的地位弱きために來る低賃銀も見逃しがたい意味を有する。一般的には人口密度大なる點を記憶せねばならぬ。¹¹⁾

之等は主として現在に於ける需要供給の關係並に諸多の理由であるが、之等現在の諸事情を自己の周圍に立働かしめて居るところの「流れ」或は「相場」又は「格」と云つたものがあることを強調したい。所謂歴史的に

11) 非常時下に於ては多少異なる委をとる。拙稿「支那事變下勞務の配置に就て」(彥根高商論叢、第二十七號)參照。
12) 拙稿「我國民經濟の日本的性格」(彥根高商論叢、第二十五號)。

定まれる價格であり、繼承せる價格である。

恰も鶏卵に一定の相場があるごとく、勞働にも一定の相場がある。現在の卵の相場が近き過去の相場の繼承であるごとく、現在の勞働の相場は近き過去の相場の繼承である。近き過去の相場は亦それ以前の相場の繼承であり、順次遠き過去の價格に及ぶ。「自然は飛躍せず」。曾てギリシア・ローマに文化燦然たり得た所以は、哲學者たちが生活の煩らはしさから解放されて觀照的たりえたからだと云はれる。生活の煩らはしさ殊に食ふための醜態さは勞働者に任せられえたからである。中世封建社會に於て「武士は喰はねど高楊枝」たりえた所以は、影武者たる勞働者がありえたからに外ならぬ。考へること、頭の仕事、國をまもること、大義名分を立つる仕草が高く評價せられ、食ふことゝ働らくことは問題の外に置かれた時の勞働の價格は推して知るべきである。長き顯著な封建社會に於て、勞銀は十分に落ちつくところに固定せしめられた。そしてそのまゝ明治維新となつたのが日本である。

其の後迂餘曲折はあるが、日本資本主義を成長せしめるためには、土地所有者並に資本所有者を護る必要があつた、ことは前述したところである。勞働が受取らねばならなかつた「格」たるや、正に説明するまでもないだらう。勞働は資本制下に在りても、依然縁の下の力持ちである。勞銀は斯くて低く歴史的に傳はり來り傳はりゆく。

五

封建社會に在りても、資本主義經濟制度の下に在りても、依然縁の下の力持ちであつた勞働は、果して國家全體主義下に於ても亦さうであるか。然らざる理由がある。

即ち、時局重大化するにつれて國家總力戰の必要を告ぐる切なるに至り、勞働が國防資源として見らるゝ現時局下に於ては、勞働は產業界の地位者であると云はなければならぬ。官界に於ける官吏の地位と正に照應する。なればこそ、勞働乃至社會立法も、その要求としてもつ現下共通の性格は、勞働評價が大となつた

ことである。一方經濟的には、從來の個人主義的・自由主義的なる社會民主々義的勞働觀が捨てられて、賃銀も勞働報酬とは見られず、勞働契約も勞働と賃銀との物質的交換關係と見られなくなり、單なる勞働保護より一步進んで、勞働の培養と云ふ積極性を獲得するに至つた。

しかしながら、國家資源としての勞働は、生産力の立場から觀らるゝために、例へば、勞務配置に關する諸々の法制に見らるゝごとく、分配的側面の見落しなきにしもあらず。即ち曾て自由主義・個人主義に則つた資本主義下に在りては、勞働は分配的正義の觀點から處理されたが、今や國家全體主義の立場に於ては、國防充實のための生産力擴充乃至は稼働率の昂揚と云ふ生産の側から考へらるゝに至つてゐる。そして全體觀が陷る弊害の尤なるものたる特殊事情考慮の輕視より、賃銀に於ても勞働契約においても、未だしの感がふかい。

殊に勞働の稼働率を高めると云ふことは、時局下洵

價格に於ける歴史的傳統性

に必至緊急を要する運命に在る。しかるに、そのことは、動もすると、強制勞働配置・強制勞働奉仕・強制勞働契約をして、賦役勞働化するをそれ多分に在り。事實、勞務配置に關する幾つかの規制令中、従業員雇入制限令と云ひ、青少年雇入制限令と云ひ、下級視され別扱ひされてゐる點は否定すべくもない。職業に貴賤なしの理を文字通り實現するは、正に今を措いてはない。

「國家資源としての勞働保全は、決して現場の勞働の生産能率の増進のみを意味するものではない。生産的勞働生活の辛苦の後、生活資源を失つた老後の生活を保障する制度は、社會生活上相互の義務である」¹⁴⁾(圖點筆者)

要之、勞働立法は經濟立法と相關的ならざるべからず、仍ち生産と分配との綜合、云はゞ勞働者の生活安定をなし得てはじめて完きをうる。後顧の憂なからしむること、之れ勞働立法目標の最初にして最後でなければならぬ。

そこに至りて、勞銀自體の問題はおのづからまた別

14) 津曲藏之丞「勞働・社會立法」(法律時報、第十一卷第五號)。

個の姿をとる。云はゞ、社會保險、その他の經濟法の有、無乃至は不完によりて、勞銀の高さの問題も、おのづから異なる解決を要求するであらう。

經濟法に恵まれず、勞賃また低き勞働日本の狀態や、正に三思の餘地ありと云はなければならぬ。這是戰時下多少のゆとりありとしても、官僚國日本でありながら、否あるがゆゑに、平戰時を問はず逆境に置かるゝは、また下級官公吏である。爲政者の緊種一番を冀はざるを得ない。

六

非常時局統制經濟下、尠くとも現在までは、一般物價は勿論、小作料、利子、勞賃は、尙傳統に支配されてゐる。どこまで、また、如何様に傳統價格を破りうるか、が、かけられたる問題であり、一切の革新もまづそこに始まらなければならぬと思ふ。

價格における傳統の破壊は、必ずしも價格水準の變位だけに止まらない。各價格間の價位の交替に、國產獎勵・發明發見・消費節約など一切の問題がつながりをもつ。生産力擴充も配給の整備充實も、成功への途は價位の交替に在るであらう。(昭和十五年四月)